
銀の殺人鬼改め・・・

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の殺人鬼改め・・・

【Nコード】

N7662H

【作者名】

蒼

【あらすじ】

十六夜咲夜が紅魔館のメイド長になった経緯の話

（前書き）

この話は咲夜さんが昔人を殺したという設定です。この設定はない、という方は読まないほうが良いです。

ポタッポタッポタッ

私は目を開ける。どうやら雨のようだ。

わずかな食料と銀のナイフ、着替え一着、そしてそれらを収める力
バンそれが今の私のすべて。

家を追い出されてからどれほどたったか。

―化け物だ！時を止めるなんて人間ではない！

―あんたは私の子じゃないわ！

―化け物は消える！殺してやる！

―ここから出ていけ！

追い出されたときの言葉が頭の中を駆け巡る。時を操ったのは友達
を助けるため。けれども、彼女達も私に石を投げ付けた。

時など別に操れなくて良かったのに、この力の所為で人には化け物
と呼ばれ殺されかける。

さらには一人だと知った妖怪に食われかける。

人から逃げ続けるのにも疲れ追っ手を殺したのはいつの日からか。

グチャッグチャッ

ぬかるんだ地面を歩く音が響く。

また妖怪かまたは人か、こんなあばら家に隠れていても見つかるの
は目に見えている。

先手必勝だ。

バンッ

銀のナイフを手に扉を蹴り飛び出す。

黒い四つ足の体に、蠢く触手、鋭い牙、人の倍くらいの大きさ。や
はり妖怪だったか。

こちらに気付く前にナイフを頭にむかって投げる。

「グオオオオオオン」

当たったようだ。ただ、痛みに吠えただけか、それとも・・・
ガサツガサガサ

同じ姿をした妖怪が木々の間から顔を出した。

やはり仲間を呼ぶためか、・・・五匹は殺しづらい。ならば！

ピタッ

妖怪の動きが止まる。それだけではない、森の木々の動きすら止まる。

私の能力で時を止め、その間にナイフを妖怪の周りに投げる。

三、二、一

「ッギ、グオオオオウ！」「」

時が動きだした途端ナイフが刺さり、赤黒い血が吹きだす。悲鳴をあげ、のたうち回る妖怪達。

止めにナイフを頭に飛ばすと全ての妖怪がおとなしくなる。

「ふう」

妖怪に刺さったままのナイフを引き抜き回収する。抜いたときに血が顔につくが気にしない。

全てのナイフを回収し、あばら家へ戻ることにした。

キュツキュツ

血の付いたナイフを磨く、布が無いので着ている服でだ。

あんな妖怪の死体を埋める気にはならない、かといって放置すれば人か妖怪がそれを目印にやってくる。

少し迷ったが、着替えると近くの小川で服と顔を洗い、あばら家から出ていくことにした。

月だ。月の出る夜は妖怪が活発になるという、警戒して歩く。

「こんばんは」

人に声をかけられた。私を知らないのだろう。

「こんばんは」

まだ若い女だった。

「ここは人里に近いんですか？」

「ええ、あとちょっと歩けば村があります」

ならばあまり長くいるのは得策ではないな。

「ありがとう。では、さようなら」

急いで立ち去ろう。村人の中には私の格好を知っているものもいるだろう。

「待つて」

「何か？」

ばれたか？

「あなた服がぼろぼろよ。それに、そのカバンも汚れてる。家に泊まったらどう？」

・・・予想外だった。だが泊まって正体がばれたら大変だ。

「大丈夫です」

「いいから！」

「えっ、ちよつと」

無理矢理掴まれて村に連れていかれた。

「よっ鈴ちゃん。おかえり」

「あっ、ただいま」

門の所に立つ男が隣の女に声をかける。

「ん？見かけねえ顔だな？」

「さっきそこであつたのよ」

「そっか。ならいいな」

そう言つて、さつと退いて通してくれ

「おい、まて」

なかった。また違う男が来た。そいつはこちらをしばらく見ると叫んだ。

「てめえその銀髪に目の色。銀の殺人鬼だな！」

このあだ名がついたのはいつ頃だろうか？襲つてくる人を倒していたら、髪の色と銀のナイフを使うところから銀の殺人鬼と呼ばれるようになった。

「なんだって！」

その声を聞きつけ武器を持ち取り囲んでくる人々。

鈴も憎しみのこもった瞳でこちらを見る。

「やっちまえ！」

「この悪魔！」

「人殺し！」

「化け物め！」

口々に叫ぶ。石も飛んできた。

「かかれー！！」

「「「うおおおおお！！！！」」」

ついに襲い掛かってきた。鋤、鍬、斧などを手に一斉に飛び掛かってくる。

また、殺すのか。

そう思つても、殺さなきゃ殺される。ナイフを構える。

ドスドスツ、ボタン

即座に七人仕留める、まだ二十人くらい敵はいる。

さすがに仲間が倒れたのを見て怯えたのだろう。なかなかかかってこない。

「い、行くぞー！」

「「お、おおー！！」」

覚悟を決めたのか二十人一気に来た。が、気が付くと全員体から血

を流し倒れていた。

鈴は逃げたようだ。淡々とナイフを回収する。

ゾクッ

「あら、血の匂いがすると思って来てみれば」

恐ろしい力を感じ、目を上に向ける。そこには、吸血鬼がいた。

「こんばんは、あなたが最近話題の銀の殺人鬼かしら？」

「そうだけど」

ナイフを構えつつ相手の反応を見る。

「私はレミリア・スカーレットよ。あなたの名前は？」

「妖怪に名乗る名などない！」

そう叫ぶと共にナイフを吸血鬼に投げる。

さすが吸血鬼というべきかナイフを避け素早くこちらに迫ってくる。胸を狙った大振りの一撃、只の爪だが吸血鬼の爪は硬く鋭い、人間の肉など簡単に裂ける。

その一撃を後ろに跳んで避けながらナイフを大量に投げる。

「ふふっ、なかなかやるわね。ならこれはどうかしら？」

バサリと翼を鳴らし先ほどよりも速く飛び、私に肉薄し右腕で腹部を物凄い力で叩いた。

「カハッ、ゲホッ」

腹をおもいつきり殴られたため、地にひれ伏し口から鮮血が飛び出した。

「あら、もうお仕舞いなのかしら？」

足に力を込めゆっくりと立ち上がる。

「今度はこちらの番よ」

そう言い、時を止めた。

止めた間に宙に浮いている吸血鬼の周り360°にナイフを配置、逃げる隙間はこれでなくなった。

―時が動きだす。

「なっ！」

さすがの吸血鬼も驚いたようだ。あれを突破できるはずがない。

バキン

っナイフが砕けた！？吸血鬼は？

ピタッ

首筋に鋭いものをあてられる感触。

「時を止めるなんてねえ。でも私に勝てるわけないわよ」

「殺すならさっさと殺せ、吸血鬼」

「クスッ、殺すには惜しい能力ね。それに、とっても美味しそう」

「へ？」

今美味しそうって言わなかった？ってことはまさか

「いただきます」

カプッ

「っ！」

首筋に犬歯を突き立てられる。

ゴクッゴクッ

「っあ・・・う・・・っ」

力がだんだん抜けていく、いや違う抵抗出来ないんだ。

「どうかしら？吸血鬼の犬歯からは相手を逃がさないようにごくわずかにだけ媚薬の様な成分が注入されるの」

「っん！？び、媚薬？」

そんなものが！道理で抵抗出来ないわけだ。

「あっ・・・っ」

ついに吸血鬼にもたれかかるような格好になってしまった。吸血鬼は構わず吸い続ける。

「はぁー美味しかったわよ」

あのあとしばらく吸われ続け完全に動けなくなった私ににこやかに微笑みそう言った。

「あなた名前は？」

「名前は捨てました」

親に見捨てられたときに名前は捨てた。

「へえ、あなた私の従者になりなさい」

私から襲い掛かったのにもかかわらず、私を殺さずさらには居場所までくださるのか。

「はい、お嬢様」

私の返事を聞き、にやりと笑うお嬢様。

「名前がないと呼びにくいわね。・・・十六夜咲夜でどう？」

「ありがとうございます、お嬢様」

本当に嬉しかった。私に居場所を名前を未来をくれたこの人を守るう。

忠誠を誓おう。

「行くわよ、咲夜」

「はい、お嬢様」

私の長い夜はついに明けた。

（後書き）

戦闘シーンがあまり上手く書けませんでした。意見がありましたらぜひ書いてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7662h/>

銀の殺人鬼改め・・・

2010年10月8日22時20分発行